

## (一) 葛根湯

処方 葛根 麻黄各四、〇 桂枝 芍薬 甘草各二、〇 大棗 ひね生薑各三、〇  
水四〇〇、〇(二合)を以て煮て二〇〇、〇(二合)とし滓を去り一日三回食前に分服

構成 この処方桂枝湯に較べると葛根麻黄があつて桂枝芍薬の量が少く、麻黄湯に較べると葛根があつて杏仁がなく且つ甘草の量が少い。従つて桂枝湯よりも表が実し、麻黄湯の如く水分障碍がない時に使うことが了解される。

この処方は表実でその実が項背の緊張として現われるか、或は体表部の限局性緊張として現われるかである。熱を伴うときと然らざるときとがある。

運用一 発熱、悪寒或は悪風、僧帽筋の範囲に於ける筋肉緊張、脈浮数緊を目標にする。

これは傷寒論太陽病中篇の

「太陽病、項背強ること几々、汗無く悪風するもの」

に基くもので、太陽病は体表に熱のある状態を指し、発熱症状を伴い、項背部が緊張するとは大体に於て僧帽筋の範囲だが、後頭部に及ぶこともあり、頭痛として現われることもあり、項や肩のこともある。大抵自覚的にも他覚的にも之を認められる。肩胛骨間腔に緊張が及ぶことは割合に少く、腰まで及ぶことはない。若し腰まで及んで痛むようなら麻黄湯の適応証になる。汗無くは消極的に限定したもので若し汗があれば桂枝加葛根湯だと

の鑑別点にする伏線がしいてあるわけだ。悪風は風にあたると気持が悪い感じで知覚過敏を示す。しかし臨床的には悪寒であつても構わない。悪風とした理由は一つには葛根湯は薬理的に麻黄湯より桂枝湯に近いことを示したもので、葛根湯や桂枝湯は気血であり、麻黄湯は気水であることを病理的に裏付けようとしたものだ。

以上の条件があれば感冒、流感、気管支炎や肺炎の極めて初期、麻疹、痘瘡、脳膜炎、リンパ腺炎、扁桃腺炎、猩紅熱その他の急性伝染性熱病の殆ど凡ての場合に葛根湯は使用される。但し使用し得る時期は発病後一〜二日位のことが多い。それ以後でも前記適応証さえ具していれば勿論使って宜い。従つて腸チフスでも第二週以後のものや、伝染病でも肺結核などでは先ず使う機会がない。

鑑別すべきは

イ、発熱悪感悪風などの発熱症状に対して麻黄湯、桂枝人参湯、防己黄芪湯、大青龙湯、四逆湯などの諸方はそれぞれに特有な症状があり、葛根湯は項背強が特有症状だからその点に着眼する。また脈が浮数緊の三つが必ず揃っているから桂枝人参湯の浮数弱、麻黄細辛附子湯の沈数、四逆湯の遅などとの区別も容易である。

ロ、発熱症状と項背強とがあるときに無汗は葛根湯、有汗は桂枝加葛根湯である。その他葛根湯は脈浮数緊、桂枝加葛根湯は脈浮数弱であることも、鑑別点になる。

ハ、項背でなく他の広い部位の緊張には括蕁桂枝湯、腰痛や関節痛には麻黄湯、麻黄加朮湯、麻杏薤甘湯、桂枝附子湯、甘草附子湯、などだからそれにより区別される。

運用二 熱がなく項背部緊張によつて使う場合

この時は脈は浮緊が原則だが浮はさほど著明ではなくただ緊だけのこともある。しかし沈ではなく、沈だと効

かない。

項背強が著明に自覚されているときと、そうでなく、他の主訴が強調されるあまり項背強はごちらから紐さねばならぬときとがあるから注意を要する。

この用法に従うのは肩凝り(類証鑑別参照)四十肩、歯痛、蓄膿症(但しあまり慢性になっているものは原方だけでは奏効し難いから濃い膿には桔梗三〇を加え、のぼせて便秘するものには川芎三〇、大黃二〇を加える)中耳炎(蓄膿症と同様)

項背強の応用として金匱要略瘧病に

「太陽病汗なくして小便反って少く、氣胸に上衝し、口噤して語ることを得ず、剛瘧をなさんと欲するもの」とあるのに従い、破傷風の初期、小児痲痺の初期、脊髓空洞症等の瘧瘳又は瘧性痲痺に本方を使うことがある。但し弛緩性痲痺には効かない。

鑑別すべきは

イ、項背強は葛根湯だけでない。他の処方でも項背強のを治すものとして桂枝加葛根湯は汗が出ている、若くは虚証である。その他

大柴胡湯 心下急があり、脈は決して浮にはならぬ。

大陷胸丸 心下緊満で脈は沈緊。

小陷胸湯 心下緊硬で脈は浮滑。

葛根黃芩黃連湯 下痢や心下痞硬などの腹部症状がある。

桃核承氣湯 のぼせて便秘し鬱血症状がある。

当帰芍薬散 肩凝りを訴え粉わしいが虚証で貧血性且つ脈が弱い。

ロ、瘧に対しては括葉桂枝湯は脈が浮遲であり、筋肉緊張は項背でなく身四肢に起る。大承氣湯は瘧病の症状が完成されたものを使う。

運用三 項背とは限らず、身体の何処でも構わないが殊に上半身に於て限局性の化膿性浸潤を使う。

その場合目標になるのは矢張り運用一、二の所見である。即ち発熱悪寒頭痛等の発熱症状と脈浮数緊であるか、或は発熱症状がなくとも脈浮緊であるかに拠る。発熱は赤味が勝り腫脹は硬い。

例えば皮膚炎、急性濕疹、蕁麻疹等の皮膚病で分泌物がない(無汗と見る)或は極く僅少で痂皮又は浸潤が著明のもの(しこりと見る)皮下膿瘍、筋炎、蜂窩織炎、リンパ腺炎、リンパ管炎、面疔、背癰等。

類証鑑別すべきは

麻黃細辛附子湯 冷え性貧血性で脈沈

附子湯 冷え性貧血性で脈沈小、発疹もこまかく貧血性。

桂麻各半湯 痒みが著しく顔がのぼせて紅潮を呈する。

大青龍湯 痒み強く煩躁する。

越婢加朮湯 痂皮、分泌物、肉芽がきたない。脈は沈のことが多い。

桃核承氣湯 発疹や腫脹が鬱血性で何となく暗赤色を呈する。のぼせて足が冷え便秘する。

大黃牡丹湯 下半身の化膿症に使う。頭痛項背強などはなく、脈も緊ではあるが浮数ではない。

(六八) 麻黄湯

処方 麻黄四、〇(節を去ったものなら三、〇) 桂枝二、〇 甘草一、〇 杏仁四、〇

構成 桂枝麻黄で表の実熱を発散し、麻黄杏仁で裏水を逐い、甘草は桂枝麻黄を扶けて緩和的に働く、基本的な処方だが使う機会はあまり多くはない。

運用一 発熱

「太陽病、頭痛発熱、身疼、腰痛、骨節疼痛、悪風、汗無く而して喘するものは麻黄湯之を主る」(傷寒論太陽中)

之が麻黄湯正面の証であって、他の運用の機序は凡てこの中に含まれていると云ってよい。喘以外の症状は凡て体に起った発熱症状である。故に之を表熱とする。桂枝麻黄で発汗するし、麻黄湯の他の条文に脈浮緊とあるから実熱であることは言うまでもない。だが部位は桂枝湯よりも深い所に起っており、その証拠には腰痛や骨節疼痛がある。骨や関節は体では最も深い部分に在り、そこが痛むのは概ね水や寒の変化によると考えられている。麻黄は甘草麻黄湯の適証が裏水とあるように深い部分の水の停滞に対して之を除去する作用がある。尤も深いといっても体では腰や骨節であり、身では胸である。腹まで深くは入らない。そして桂枝湯が自然発汗している

ような外に漏れ易い状態に有るのに対して麻黄湯は自然発汗がなく内に病邪が凝滞していると考えられるときに強く発汗する薬である。汗無く而して喘するとは汗が出ていれば喘はしないが、汗無く内に籠っているからそのため喘を起すのだというのであって、病が深く且つ凝固性で且つ劇しいことを示している。

頭痛は熱気が上に昇って来るためと考えられる。故にこの機序は又鼻血を出す機序と等しいものである(後条参照)悪風は風をにくむ、風に当ると気持が悪い。即ち知覚過敏である。前に述べたような発熱状態でなぜ悪寒せずに悪風するか、之に就ては古人の説にも決定的なものがなく、私も固りよく判ってはいないが、発熱するのは陰不足して陽気が陰中に陥入するからだし、悪寒するのは陽不足して陰気が陽中に入るからである(弁脈法)然るに麻黄湯の証は陽が重い、即ち陽熱の気が強いので陽不足による悪寒は起らずにただ発熱するだけである。悪風は衛が傷れると起るもので、衛を傷るのは風である。若し傷寒なら寒が直ちに榮血に入り陽気を奪い陽不足になって悪寒する。然るに此条は傷寒ではなく太陽病だからたと衛を傷るだけで榮血は冒さない。故に悪風だけで悪寒するには至らない。

所が傷寒だと麻黄湯証でも悪寒する。

「脈浮にして緊、浮は則ち風をなし、緊は則ち寒となす。風は衛を傷り寒は榮を傷る。榮衛俱に病み骨節煩疼す。其汗を發すべし。麻黄湯に宜し」(傷寒論可汗篇)

がその場合である。

臨床上では腰痛や骨節疼痛などがなくてもたと発熱脈浮緊だけでも本方を使う。

「太陽病十日以去(中略)脈たと浮のものは麻黄湯を与う」(傷寒論太陽中)

「脈浮の者は病表に在り、汗を發すべし」(同右)

「脈浮にして數のものは汗を發すべし」(同右)

「陽明中風(中略)病十日を過ぎ(中略)脈たと浮にして余証なきものは麻黄湯を与う」(傷寒論陽明病)

の如きは脈浮を以て病表に在りとし、數を以て熱となし、緊を以て実とし、先ずその表を解すために麻黄湯を用いるというのであって、頭痛とか何だとかの有無に拘泥せずに使う。つまり表証があれば先表後裏の治療原則に従ってとにかく表証を取ってみるのである。

感冒、流感、肺炎、腸チフス、その他病気の種類如何を問わずに使うことが出来る。発病当初でも日がらを経たものでも表証さえあればよい。但し肺結核に使うことは無い。

〔症例〕69歳，男性，陶芸家。

〔初診〕昭和57年5月。

〔主訴〕頭痛と右手に力が入らない。

〔既往歴〕昭和42年に交通事故で第12胸椎骨折。同年、胃潰瘍の手術を受けている。

〔現病歴〕昭和56年にK大医学部付属病院でのどの検査を受けているうちにショック症状を起こして意識不明となって発症。頭痛と右手の脱力とは、同病院では神経麻痺といわれ、いろいろ治療したがまったく無効であったという。なにしろ著名な陶芸家として粘土を練る時に力を使うのはもちろん、作品を作るのに右手は生命である。さらにくわしく聞いてみると、頭重と頭痛は1日中とれない。右手の握力が少ない。右手指が握拳する。朝腫れぼったくて、右手とくに指が全体に腫れている。右腕がだるい。右頸がこつてくると頭痛がひどくなる。右足がしびれる。口乾がある。

〔現症〕身長155cm，体重65kg。大便1日1行，夜間排尿1～2回。血圧130-80。腹部は力があり，特記すべき所見はない。

〔経過〕結局，脳循環障害による右半身の軽度の麻痺と考えて釣藤散を投与した。2か月後には頭重と頭痛はほとんど消失した。

57年7月，桂枝加蒼朮附湯加釣藤に変方。これではあまり効果がなかった。

同11月，葛根湯合桂枝茯苓丸料にする。これでかなり改善がみられた。

58年7月，だいぶよくなったが，依然として右手，右指が伸びない。右手がふるえる。右項が痛む。そこで葛根湯加蒼朮茯苓薏苡仁に変える。

同12月，右手が大変よくなった。手が伸びる。ふるえなくなった。左右の手の感じは変わらなくなった。

その後も前方を少しづつ飲んでいる。1か月分を3か月ぐらいの割合である。

昭和59年11月，新芸術院会員になったことを新聞で知り，祝電を打つ。

〔考案〕葛根湯加蒼朮茯苓薏苡仁は，手のふるえやしびれに有効な場合がある。私は桂枝加蒼朮附湯証の実証に用いる。薏苡仁は鎮痛作用増強のため加味した。

〔症例〕60歳，主婦。

〔初診〕昭和63年5月。

〔既往歴〕7年前から甲状腺腫あり。当院で炙甘草湯を服用して，だいぶ腫れがひいている。ほかに最低血圧が高いが，とくに薬は飲んでいない。

〔現病歴〕左腰から足にかけて痛むようになった。近医で坐骨神経痛といわれて服薬したが効果がなかったので来院。

左腰から足にかけてひどく痛む。夕方になると悪化し，痛みが強い。寒がりてとくに足や腰が冷える。便通正常。夜間尿は2回。

〔現症〕身長156cm，体重46kg。血圧144-94。

顔色は血色が悪く，脈は乱れている。舌には異常なし。

腹診上，特記すべき所見はない。

〔経過〕はじめ補陰湯を投与。1か月しても一向によくならない。近頃は背中まで痛み，首すじがこるという。

この頃，かぜをひいたので葛根湯を与えたところ，これを飲んでいる間だけ腰や足の痛みがよかったという。

そこで，葛根湯加蒼朮，当帰各5.0に変方したところ，坐骨神経痛はめきめきよくなってきた。1か月後には，ほとんど痛みが消失した。その後，1か月服用した後，あれほどの痛みが，他の薬を飲まずによくなったので驚いたといつて廃薬した。

〔考案〕葛根湯に蒼朮，当帰を加えて鎮痛作用を強化した。なお葛根湯加蒼朮は旧中将湯診療所の創業期に勤務していた吉村得二医師が咽痛に愛用した薬方である。

〔症例〕36歳，女性。地方に住む著名な書道家。

〔初診〕昭和58年12月。

〔現病歴・現症〕昭和51年。当時28歳ではじめて来診された時は，結婚後4年経過したが子供ができないという。月経は順調で，月経困難もないが，病院で無排卵性といわれた。夫の精子は正常の半分。

身長164cm，体重52kg。冷え症，貧血気味で，しもやけができるということと当帰芍薬散。はじめ胃が弱く，もたれるので人参を加味。5か月後から人参をやめて附子，乾姜各0.5を加味。それから通算4年4か月の間，はじめに服用を続け，ついに55年6月，妊娠が確実となった。実に結婚9年目のことであった。

不妊症に漢方治療が奏効する時は，およそ半年から1年の間に妊娠の可能性が高まる。そこで1年以上たつと次第に見込みが少なくなる。もともと，妊娠しやすい体になってはいるので，以前にも，知り合いの医師の娘さんで，2年間服用後，もう35歳を過ぎたからだめだろうとあきらめて廃薬したところ，1年後に妊娠した人や，3年と少しの間飲んで，やはり30歳を過ぎてあきらめたのであるが，数か月後に夫とハワイへ旅行したら妊娠したという人もいる。

私の経験例では，このかたが最長服薬記録であった。大体，書道家は辛抱強いのではなかろうか。そのせいか漢方治療の成績のよい人が多いようである。

さてこの女性は，56年1月に無事に女兒を出産。同年6月に第2子妊娠，57年出産。そして58年10月には第3子を出産している。

ところが同年12月15日に来た手紙によると，前の2回と違って今度は母乳の出が悪い。何とかならないものであろうかとのことであった。

〔経過〕乳汁欠乏症には蒲公英湯がよいというが，私はこれを使った経験がなかったので，体格を考えて葛根湯を飲ませることにした。エキス5.0，分2を送り，また時々葛餅に蜂蜜をかけて食べるようにと書き送った。

返事はすぐに来た。12月21日付なので5日ぐらしか飲んでないのだが，「この薬を飲むようになって母乳の分泌が急によい。おかげで子供もよく眠り，日ごとに丸々としてきた云々」とあった。

〔症例〕16歳，男性，高校生。

〔初診〕平成2年2月。

〔主訴〕背中赤い発疹。

〔既往歴〕特記すべきことなし。

〔現病歴〕2年前から背中に赤い発疹ができる。血液，尿の検査で異常なく，皮膚科で色素性蕁麻疹と診断された。背中に赤いぶつぶつができてかゆい。暖まるとぶくつとふくらんでくる。皮膚科でもらった薬をつけると消える。季節にかかわらずできる。原因不明である。

夏は汗をかきやすい。肩こりはなく，腰痛もない。二便正常。

〔現症〕身長171cm，体重61kg。

体格，栄養状態良好。脈の緊張もよく，舌にうすい白苔がある。

背部を見ると，背上部中央に，縦に長い菱形に局限した発疹が見られる。発疹の一つ一つが色素沈着を伴っており，これが色素性蕁麻疹というのかなと思った。

次に腹診で腹筋の緊張がよく，腹壁が過敏で，非常にくすぐったがる。とくに著明な「臍痛」が認められた。血圧は114-60。

〔経過〕患部の分布状態（項背部からやや下にかけて）と臍痛を指標に葛根湯加荆芥，檉各3.0を投与した。

3週間後，背中の発疹は著明に減少した。

6週間後，発疹の色がうすれ，かゆみも消失し，治癒と考え廃薬。

最終回の診察時，おもしろいことに腹診の過敏性が著しく減少していた。

〔考案〕「臍痛」は，大塚敬節考案の腹証。臍上が過敏で，臍輪の直上に圧痛を訴え，示指の指頭で軽く触れても，疼痛を訴えるものである。先生は副鼻腔炎や結膜炎に葛根湯を用いる時，この腹証を参考にするという。

私は昭和44～45年頃，四谷のご自宅で先生に，「臍痛があるとなぜ葛根湯が効くのでしょうか」とたずねたことがある。その時先生は，「要するに腹筋の緊張が強いということだな」と返事されたのを覚えている。

第3巻 第1号 (通巻第9号) 昭和28年2月1日発行

原 著

漢方方剤の煎出法に関する研究 (第1報) 麻黄湯について ……………渡辺 武・後藤 実… 26

第8巻 第3号 (通巻第25号) 昭和32年12月31日発行

論 説

葛根湯の腹証について ……………東 京 大塚 敬節… 13

第40巻 第2号 (通巻152号) 平成元年10月20日発行

論 説

葛根湯加川芎辛夷の成立に関する一考察 ……………寺澤 捷年… 15

原 著

和漢医薬学会誌 5, 21-26, 1988

### 顎関節症に対する葛根湯の使用経験

佐野 和生,\* 井口 次夫 長崎大学歯学部口腔外科学第二講座

原 著

和漢医薬学会誌 5, 41-45, 1988

### 葛根湯のアルサス型および遅延型アレルギー反応に対する作用

志賀 隆,\* 小松 靖弘, 細谷 英吉 津村薬理研究所免疫薬理研究室

444

和漢医薬学会誌 6, 444-445, 1989

### 副鼻腔気管支症候群 (SBS), とくにびまん性汎細気管支炎 (DPB) に対する 葛根湯加川芎辛夷の併用効果

江頭 洋祐,\* 牛島 正人 公立玉名中央病院内科

和漢医薬学会誌 6, 448-449, 1989

### 葛根湯をはじめとする数種漢方処方の中樞作用

松本 欣三, 佐藤 貴史, 渡辺 裕司\* 富山医科薬科大学和漢薬研究所生物試験部門

原 著

和漢医薬学会誌 7, 35-45, 1990

### 漢方方剤の薬理活性研究 (第3報<sup>1)</sup>)

#### 葛根湯の免疫応答に及ぼす影響

松田 秀秋,\* 森浦 俊次, 久保 道徳 近畿大学薬学部薬用植物学研究室

和漢医薬学雑誌 12, 66-70, 1995

### ラット及びヒトへの葛根湯 (Ge-Gen-Tang)

#### 経口投与による尿中排泄成分について

安田 高明<sup>1)</sup>, 鹿野 美弘<sup>2)</sup>, 斉藤 謙一<sup>3)</sup>, 大澤 啓助<sup>4)</sup> <sup>1)</sup>東北薬科大学生薬化学教室, <sup>2)</sup>北海道薬科大学漢方薬物学教室

和漢医薬学雑誌 11, 392-393, 1994

### 和漢薬方剤「葛根湯」の抗ウイルス効果に関する研究

長坂 和彦<sup>1)</sup>, 黒川 昌彦<sup>2)</sup>, 白木 公康<sup>3)</sup>, 寺澤 捷年<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>富山医科薬科大学医学部和漢診療学講座, <sup>2)</sup>同・ウイルス学教室

葛根湯 小青龙湯

喘息インフルエンザ  
小青龙湯

HSV  
インフルエンザの併用

麻黄湯  
小青龙湯  
この型のインフルエンザ  
ウイルスに効果がある

排膿散 しこりの強い点やなかなか排膿しない点は似ているが、脈は浮緊でなく大体普通の脈で項背強などはない。排膿散は局所症状だけで他部や全身の症状は伴わない。

運用四 発熱して悪寒或は頭痛し、且つ下痢するものに使う。

この場合の下痢は裏急後重することが多い。従って急性大腸カタルや赤痢の発病初期に使う。大抵一日か二日で治ってしまう。脈は矢張り浮数緊である。

この使い方は傷寒論太陽病中篇の

「太陽と陽明の合病は必ず自下利す」

に基いたものである。太陽病は前記の通り表熱の状態、陽明病は裏熱の状態で消化器が熱実して腹滿便秘或は下痢を起す。表と裏との状態が同時にあれば先表後裏の法則で先ず葛根湯の如き發表剤を使うことになっている。それで表証も裏証も一べんに取れて治るのが普通だが、若し表証だけは取れたが裏証が残ったとすればその時はじめて下剤を使うことにする。

#### 類証鑑別

黄芩湯「太陽と少陽の合病にて自下利するもの（傷寒論太陽病下）」で太陽病と自下利の点で似ている。臨床的にも発熱悪寒頭痛下痢の症状が共通することがあるが、陽明病と少陽病とは病の部位と症状が違うのであって、少陽病は胸から心下部にかけての熱実の状態だから訴えも同部に起り得るもので、臨床的には黄芩湯は下痢腹痛を訴えるのが普通である。葛根湯には腹痛は無いか或は極く軽い。大柴胡湯、桃核承氣湯、桂枝加大黃湯などは発熱下痢が共通しても悪寒頭痛脈浮ではなく他にそれぞれ特有な症状がある。

## 運用二 喘

喘は気管支喘息は勿論だが、他の病気でもせいぜいするもの、呼吸困難のあるものは喘である。太陽病たと陽明病たるとを問わない。熱病たと無熱病であるとも問わない。たと表裏の状態は必ずなければならぬ。

「太陽と陽明の合病喘して胸滿するものは下すべからず。麻黄湯に宜し」(傷寒論太陽中)

「陽明病、脈浮、汗無くして喘するものは汗を發すれば則ち愈ゆ。麻黄湯に宜し」(傷寒論陽明病)

はその例である。但し気管支喘息に麻黄湯を使う機会は少い。発熱を伴い脈浮緊數汗出があるときか、無熱で脈浮緊、他部に症状なき時とただで、多くの場合は脈浮でも例えば麻杏甘石湯、小青龍湯、厚朴麻黄湯などの処方を使うことが多い。

## 運用三 鼻血

「傷寒脈浮緊、發汗せず。因って衄を致すものは麻黄湯之を主る」(傷寒論太陽中)

この衄即ち鼻血は

「太陽病、脈浮緊汗無く、發熱身疼痛、八九日解せず、表証仍ほ在り。これ当に其汗を發すべし。薬を服し已り微しく除き、其人発煩目瞑す。劇しきものは必ず衄す。衄すれば乃ち解す。然る所以のものは陽気重きが故なり。麻黄湯之を主る」(傷寒論太陽中)

で説明されている通り陽気が重い、即ち陽の熱気が強いから、頭部に熱が強く充血性の鼻血を出すというのである。

この鼻血は熱病でも無熱病でも(例えば高血圧性の鼻血)脈浮緊、のぼせた顔色をしていれば麻黄湯を以て治す。若し脈弱、脈沈、或は他部に症状があれば瀉心湯、桃核承気湯など他の処方の適応証である。

葛根の薬理①

生薬：葛根  
成分：  
処方：葛根湯

雑誌名：現代東洋医学 13巻 1992年 3号 86頁 通算 頁

報告：実験 標的器官：感染・免疫系  
剤形：エキス剤 投与経路：その他 投与量：

併用薬：

内容：葛根および葛根湯の感染症に対する薬理作用について①Sialidase阻害作用

葛根の薬理②

生薬：葛根  
成分：  
処方：葛根湯

雑誌名：現代東洋医学 13巻 1992年 3号 86頁 通算 頁

報告：実験 標的器官：感染・免疫系  
剤形：エキス剤 投与経路：動物経口 投与量：

併用薬：

内容：葛根湯の免疫応答に対する薬理作用について①正常動物の免疫能に対する作用②免疫亢進動物の免疫能に対する作用③免疫低下動物の免疫能に対する作用

葛根湯の薬理③

生薬：葛根  
成分：  
処方：葛根湯

雑誌名：現代東洋医学 13巻 1992年 3号 88頁 通算 頁

報告：実験 標的器官：心臓・循環器系  
剤形：エキス剤 投与経路：動物経口 投与量：

併用薬：

内容：葛根の循環器系に対する薬理作用について①Puerarinの冠状動脈への作用②不整脈モデル1) アコニチンにより誘発した心室性期外性収2) BaCl2により誘発した心室性期外収縮など

抗精神病薬の副作用としての鼻閉に対する葛根湯の有用性

生薬：  
成分：  
処方：葛根湯

雑誌名：漢方医学 15巻 1991年 12号 37頁 通算 427頁

報告：治験例 標的器官：筋・感覚器系  
剤形：エキス剤 投与経路：ヒト経口 投与量：7.50g/day

併用薬：ハロペリドール

内容：抗精神病薬の副作用としての鼻閉に葛根湯が有効である事が報告された

葛根湯のアレルギーに対する作用

生薬：  
成分：  
処方：葛根湯

雑誌名：和漢医薬学会誌 巻 1987年 4号 424頁 通算 頁

報告：実験 標的器官：感染・免疫系  
剤形：エキス剤 投与経路：動物経口 投与量：1.00g/kg

併用薬：塩化ピクリル

内容：①Ⅲ型アレルギー反応の抑制、DTH反応抑制が認められた。②葛根湯の抗アレルギー作用の発現には、Ts細胞が関与する事が示唆された。

産後の乳汁分泌に対する葛根湯の使用経験

生薬：  
成分：  
処方：葛根湯

雑誌名：漢方診療 7巻 1989年 2号 47頁 通算 頁

報告：治験例 標的器官：泌尿器・生殖器・肛門  
剤形：エキス剤 投与経路：ヒト経口 投与量：

併用薬：

内容：葛根湯に、乳汁分泌促進作用がある事が報告された。